

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	MUTIA KUSUMAWATI
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">インドネシア語と日本語の初対面会話における「ほめ」の対照研究 -表現方法と展開パターンに着目して-</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 永田 良太</p> <p>審査委員 教 授 柳澤 浩哉</p> <p>審査委員 教 授 渡部 倫子</p> <p>審査委員 教 授 高永 茂 (文学研究科)</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、「ほめ」の表現方法と展開パターンに着目し、インドネシア語と日本語の初対面会話における「ほめ」の特徴を明らかにしたものである。「ほめ」は「返答」と隣接ペアを構築し、事前に起こった「ほめ」がその後の「返答」に影響を与える。これまでの研究は「ほめ」によって構築される単独の隣接ペアの分析にとどまっているが、会話中では、一つの対象に対して「ほめ」と「返答」が複数回現れることもある。そのような場合に、「ほめ」と「返答」の表現方法はどのように関わるか、また、会話が展開するにつれて「ほめ」と「返答」の表現方法に変化があるかどうかについてはこれまで明らかにされていない。</p> <p>談話展開との関係に関して、日本語における「ほめ」の研究では、一部の機能がこれまでに明らかにされているが、「ほめ」をめぐる会話参加者の詳細な相互作用（導入・返答・再ほめ・あいづち）や「ほめ」が持つそれ以外の機能については明らかにされていない。さらに、本研究で対象とするインドネシア語においては、談話レベルで「ほめ」を扱った研究はなく、インドネシア語の会話中で「ほめ」がどのように展開され、会話参加者間に「ほめ」を介したどのようなやり取りが見られるかについても明らかにされていない。</p> <p>先行研究に残されたこれらの問題点をふまえ、本論文では以下の三つの研究課題が設定されている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) インドネシア語と日本語の初対面会話において、「ほめ」と「返答」はどのような表現方法で行われるか。</li> <li>(2) インドネシア語と日本語の初対面会話において、「対者ほめ」にはどのような機能と展開パターンが見られるか。</li> <li>(3) インドネシア語と日本語の初対面会話において、「第三者ほめ」にはどのような機能と展開パターンが見られるか。</li> </ol> <p>本論文は、全7章で構成される。論文の概要は次のとおりである。</p> <p>第1章では、本研究の背景となる日本語とインドネシア語の初対面会話における「ほめ」に関する問題点が論じられ、本研究の目的が述べられている。</p>			

第2章では、まず「ほめ」や初対面会話の特徴をまとめた上で、初対面会話における「ほめ」の位置付けが述べられている。次に、インドネシア語と日本語における「ほめ」の特徴を挙げながら、「ほめ」と「返答」の表現方法、「ほめ」の展開パターン及び「ほめ」の機能に関する先行研究がまとめられている。それらの先行研究に残された問題点をふまえた上で、本研究における研究課題が提示されている。

第3章では、本研究で使用するデータについて、対象者、収集方法、及び分析対象とする「ほめ」の範囲が明確化されている。

第4章では、インドネシア語と日本語の初対面会話における「ほめ」と「返答」の表現方法について分析が行われ、それぞれの言語の特徴が明らかにされている。

第5章では「対者ほめ」の展開パターンが明らかにされている。談話の話題内における「ほめ」の機能や会話参加者の相互作用の観点から分析が行われ、それぞれの言語における展開パターンの特徴が明らかにされている。

第6章では「第三者ほめ」の展開パターンが明らかにされている。第5章と同様、話題内における「ほめ」の機能や会話参加者の相互作用の観点から分析が行われ、それぞれの言語における「第三者ほめ」の展開パターンの特徴が明らかにされている。

第7章では、本研究の結論とともに今後の課題が述べられている。

本論文は、次の4点で高く評価できる。

1点目は、談話レベルで「ほめ」と「返答」の表現方法を合わせて分析することで、談話が展開するにつれて「ほめ」と「返答」の表現方法も変化することを明らかにした点である。

2点目は、これまでの「ほめ」の研究で扱われることがなかったターンを取得しない「ほめ」にも着目し、ターンの有無の観点から「ほめ」をめぐり、会話参加者の詳細な相互作用を明らかにした点である。1点目と合わせ、これらの成果は「ほめ」を談話レベルで捉えることによって得られたものであり、発話行為を談話レベルで捉えることの必要性が示唆されたという点において、他の発話行為を研究する際にも、新たな視点を提供するものであると言える。

3点目は、これまで明らかにされていないインドネシア語の会話における「ほめ」の特徴を明らかにした点である。日本語における「ほめ」の枠組みを援用することでインドネシア語も分析することができることを示した本論文は、これまで研究が進んでいないインドネシア語の談話研究の発展にも貢献することができると思われる。

4点目は、インドネシア語と日本語を比較することで、「ほめ」に関する両言語の相違点や類似点が具体的に明らかにされた点である。それらの成果は言語学的な意義を有することに加え、今後、インドネシア語母語話者を対象とした日本語教育を考えるためにも重要である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5 年 8 月 3 日